

A Tale of Two Cities

精神的外傷とその影響

吉田 一穂

序

A Tale of Two Cities (1859)においてチャールズ・ディケンズ(Charles Dickens)は、18世紀におけるイギリスとフランスのできごとの対照性と個人の人生におけるフランス革命の精神的衝撃を描き出している。一方で、アンドルー・サンダーズ(Andrew Sanders)が指摘しているように、ディケンズは公的領域と私的領域における過去と現在の相互関係と、記憶と覚えていることの結果の相関関係を描き出している(Sanders, *Charles Dickens* 152)。

マネット(Manette)医師は、フランスのボーヴェー(Beauvais)の医師だったが、サン・テブレモンド(St. Evremonde)侯爵兄弟の秘密を知ったため、バスティーユ(Bastille)の獄に18年間幽閉されていた。このようなマネット医師は、娘のルーシー(Lucie)によって監獄から救い出されるにもかかわらず、精神異常をきたす。マネット医師の監禁状態、監禁状態からの解放、精神異常という過程において気づかざるをえないことがある。それは、*A Tale of Two Cities*の父と娘の関係が前の作品 *Little Dorrit* (1857)における父と娘の関係に似ているということである。なぜならば、*Little Dorrit*において娘のエイミー(Amy)はマーシャルシー(Marshalsea)監獄に25年間監禁された「マーシャルシーの父」、ウィリアム・ドリット(William Dorrit)に巨額の遺産が入って一家が獄を出てからも父親の世話をし、ルーシーの如く父親を精神的に救い出す側面を持っているからである。さらに、第2巻第19章の「空中楼閣の崩壊」のマードル(Merdle)夫人の夕食会でマーシャルシーのアイデンティティに逆戻りするウィリアムの状態は、マネット医師の精神異常を思い起こさせる。このことから、ディケンズが *Little Dorrit* と *A Tale of Two Cities* における父と娘の関係に個人の精神的外傷の影響を描き出したと考えられる。精神的外傷とその影響については、ディケンズの靴墨工場における実体験に基づいているところも大きいと思われる。¹ エドモンド・ウィルソン(Edmund Wilson)は、靴墨工場における経験がディケンズが生涯苦しむことになる精神的外傷を作り出したと考え、靴墨工場の記憶が突発的に蘇ることを神経症的徴候と考えている。ディケンズ自身の精神的外傷は、彼の作品に多大な影響を与え、*A Tale of Two Cities* にもその影響が窺えると思われる(Wilson 7)。

本論文では、ディケンズが精神的外傷とその影響というテーマを *A Tale of Two Cities* において父と娘の関係においていかに展開したかについて述べてみたい。

1. 監禁状態からの解放

ディケンズは、マネット医師の心理状態を説明する前に、まず人間一般について触れ、第1巻第3章の最初で神秘的な自己というテーマについて次のように述べている。

A WONDERFUL fact to reflect upon, that every human creature is constituted to be that profound secret and mystery to every other. A solemn consideration, when I enter a great city by night, that every one of those darkly clustered houses encloses its own secret; that every room in every one of them encloses its own secret; that every beating heart in the hundreds of thousands of breasts there, is, in some of its imaginings, a secret to the heart nearest it! (10) 2

人間という人間が、みんなそれぞれお互いに対して、そんなにも深い神秘であり、秘密であるようにできているということは、考えてみれば実に驚くべきことである。たとえば夜、大きな都会に歩み入るとき、その真っ暗な闇の中にひしめき合っている家々の一つ一つが、それぞれ自分だけの秘密を隠している。そしてまたそれら一つ一つの家の、一つ一つの部屋が、これまた自分だけの秘密を秘めている。しかもそこに住む何十万という人の胸に脈うつ一つ一つの心が、これまたその中に描き出す思いの像については、最も近いものにさえ測り知れぬ秘密だということ、考えてみれば、実に恐ろしいことではあるまいか。

引用における神秘的な自己というテーマの提示は、18年間バステュー監獄に幽閉されていたマネット医師のよみがえりを描写する上で効果的に働いている。なぜならば、ジョン・R・リード(John R. Reed)が指摘しているように、マネット医師は、全ての人間が互いに対して神秘的な存在であることを象徴する人物であると言っていいからだ(Reed 258)。マネット医師の場合、18年に及ぶ監禁状態の後ずっと自身の秘密を心の中に隠し持った状態にある。その秘密は、娘のルーシーと再会することにより明らかとなる。テルソン銀行のジャーヴィス・ロリー(Jarvis Lorry)はドーヴァーの宿屋でルーシーに会い、彼女の父親マネット医師は死んだと思われていたが実は生きていて、バステューに投獄されていたが今度釈放された、と告げる。今やパリで昔の召使、ドファルジュ(Defarge)の家に引き取られたマネット医師は、かつて自身にイギリス人の妻と娘がいたことを忘れたかのように、自身を精神的監禁状態においやり靴職人となり靴づくりに没頭している。ディケンズは、マネット医師が自身を閉じこめ、部屋に鍵をかけている心理状態をドファルジュに語らせている。ロリーに鍵をかけている理由について聞かれたドファルジュは、「閉じこめられたままで、何十年と暮らしておいでなすったんだからね。あけっ放しにでもしたら、こわがって気が狂って、我と我が身をずたずたにして引きむしって死んでおしまいになるかもしれねえ」(35)と言う。

ドファルジュはマネット医師の心理的衝撃を心配している。彼の説明は、バステュークの牢獄の暗い影がマネット医師の心をおおいつくして、二度と同じ目に会いたくないという恐怖心を暗示している。このようなマネット医師は、長い間精神的に死んだようになっているが、彼の状態は娘が彼の目の前に現れることによって変化する。娘が「おじさま、おじさまのお苦しみはもうおしまいになりましたのよ。わたしはね、おじさまをお迎えに来ましたの。そしてこれからイギリスへ行って、二人で楽しく平和に暮らしましょうね」(44)と言い、父親の混乱した心理状態に入りこむとき、父親は激しくすすり泣き、「嵐の後に来る静けさ、『生』という嵐が必ず最後に行きつかなければならない休息と静寂という、いわば人間性についての表象」(45)の中にぐったりとなる。

フィリップ・コリンズ(Philip Collins)が指摘しているように、作品において父親と娘の再会を再生や復活を象徴するできごとととらえることができるが(Collins 133)、マネット医師は、娘との再会后、自身のトラウマにより元の状態に戻ってしまう。第2巻第10章でダーネイがルーシーと結婚したいという意志を伝え帰ったとき、マネット医師は思い出したかのように、靴つくりを始める。このことは、マネット医師がダーネイに娘を奪われ、また元の孤独な状態に戻ってしまうのではないかという不安を表している。ディケンズが第2巻第4章でバステュークの牢獄の暗い影を追い払う力を持っているのはルーシーだけであると説明し、彼女の存在を「あの不幸の前の彼と、今不幸を越えてしまった彼をつなぐ黄金の糸と言ってもよかった」(74)と表現しているように、ルーシーはマネット医師にとって精神的な「生」に必要不可欠な存在であるからだ。

このような精神的な「生」をもたらすルーシーの強い影響力は、カートン(Carton)にも見られる。ジュリエット・ジョン(Juliet John)は、カートンをパイロンの人物であると表現し、不安、憂鬱、そして人生を浪費してしまうのではないかという彼自身の感覚の犠牲者である、と述べているが(John 189)、カートン自身が「あなたという方は、死灰のようなこの僕に、突如として生命の火を点じてくださったのです」(144)と言うように、カートンはルーシーの存在により精神的な「生」を獲得する。カートンは「これまでの僕の生活は、とても人の犠牲になるなどと、そんな大きなことの言えるようなものではありませんが、それでももしそんな機会があり、また僕にもそんなことのできる資格がありましたら、あなたのため、またあなたにとっての大事な方々のためなら、僕は喜んで一身を犠牲にするつもりです」(146)と心の中の希望を述べる。マネット医師の希望はカートンの場合ほど激しいものではなく、家庭的な幸福と関連している。なぜならば第2巻第17章で娘の結婚式の前夜牢獄にいたときのことを思い出し、「娘がふと独房を訪れてきて、はるか牢獄の外の自由な世界へ私を連れ出してくれるような気がしたのだ」(180)と語り、結婚して暮らしている自分の家へ案内してくれることを想像した、と言っていることにより、マネット医師が永続する家庭的な幸福を求めていることは明らかだからだ。ただマネット医師の心理状態が彼の過去の記憶とともに揺れ動き、不安定な状態にあることは、ダーネイとルーシーの結婚式の後、マネット医師が靴つくりで没頭していることにより明らかである。心配した口

リーが別の人間を想定し、マネット医師の状態に関する助言をマネット医師本人に求める。ロリーがある病人が精神的ショックのようなものにより発作を起こしているが、その原因は何かと尋ねると、マネット医師は、「昔何かその病気の原因になった思い出の記憶があって、それがまた異常な強烈さでよみがえったというのだろうね。つまり一番思い出したくない想像だがね。これがまた強烈な鮮明さで生き返ってきたというのかな。おそらくね、その男の心には、もともとその連想が生き返ってきやしないかという恐れ たたとえばある条件のもとで いや、もっと言えば、ある特定の場合にだねえ で、そういう恐れがずっと以前から潜んでいたんじゃないかな」(102)と言う。また、ロリーがその病人の病気が悪化すると鍛冶屋の仕事をし始めると言う、マネット医師は、「頭の混乱を指先の混乱によってすり替えるというわけだねえ。まただんだん慣れてくるとね、心に受ける手のこんだ苦痛を巧みに手先の器用さでごまかすというわけさ」(194)と病人の仕事について説明する。このようなマネット医師の症状は、精神医学における PTSD(Post-traumatic stress disorder、外傷性ストレス障害)の特徴的的症状である「再体験」と「回避・麻痺」を示していると考えられる。「再体験」は元のトラウマ体験が何度も繰り返し蘇ることを表し、「回避・麻痺」とは、再体験を引き起こすような状況を避けたり、感覚や感情を鈍化させることで苦痛を避けたりする反応である。これらの症状がマネット医師に見られる。このような症状の原因となるマネット医師の心の秘密は、ドファルジュがバステュー襲撃の際、暗い地下牢である北塔 105 番の壁に A.M. というアレクサンドル・マネットのイニシャルと「哀れなる医師」という文字を読み取ることにより明らかとなる。

バステューは、全国にある国立刑務所の一つで、建設されたとき(1370)はパリの東の人口をかためる要塞として役立てる目的を持っていた。約 30 メートルの壁を持つ建物で、8 つの塔を持ち、建物の周囲を深い濠で囲まれ、この二つの跳ね橋によらなければ、城内に入ることができなかった。この軍事要塞は、17 世紀に「国立刑務所」に切り替えられ、普通法ではなく国王が勝手に発行できる勅命逮捕状によって捕えられた囚人を送りこんだ。バステューという名前は、人々にとって「圧制」と同義語と言ってもよかった(Sanders, *The Companion* 31)。

このようなバステューの監禁状態から解放されたマネット医師であるが、こんどは娘の夫であるダーネイが亡命貴族サン・テブレモンドであると判明してラ・フォルス(La Force)監獄送りとなる。ダーネイは、囚人たちを亡霊のように思い、彼らが荒涼たる生からの解放を待っているかのように感じるが、「こうして一人ぼっちになって、もう死んだも同然だ」(244)と思い、マネット医師のかつての心境を追体験している。マネット医師にとって運命の皮肉は、娘の夫がかつて自身が文書によって弾劾したサン・テブレモンド一家の後継者であることだ。ディケンズは、*A Tale of Two Cities* において結婚によって生じた因果関係とマネット医師の複雑な心理状態を巧みに描き出している。

2. マネット医師の精神面における生と死

ダーネイがラ・フォルス監獄に入れられてからというものマネット医師は、ダーネイの安全、救出の期待が自分一人にかけられていることを知り、自分のためにつくしてくれた一人娘に対して今こそ恩返しができると思ひ、奔走する。このようなマネット医師は、一家の窮地において自分がなんとかしなければならぬという責任感から精神面における「生」を実感しているが、マネット医師の行動は、父権を回復する意味もある。長く独房生活を送り、「娘がふと独房を訪れてきて、はるか牢獄の外の自由な世界へ、わたしを連れ出してくれるような気がしたのだ」(180)とかつて語っていたマネット医師は、*Little Dorrit*でウィリアム・ドリットが娘のエイミーに精神的に依存しているがごとく、娘のルーシーに依存していたと考えられる。しかし、先頭に立ち、ダーネイと娘にはむしろ弱者として実力者の自分に任せておけ、とでもいわんばかりのマネット医師の態度を説明して、ディケンズが「マネット医師とルーシーの以前の関係は逆転した」(258)と説明することにより、マネット医師の行動は、娘への恩返しの意味だけでなく、一家の中での父権の回復を意味する行動となるのだ。

ディケンズは、マネット医師がダーネイと娘のため奔走する様子を描写する一方で、歴史の不可避性をも暗示している。「時世の流れは、恐ろしく急速に、そしてまたどうにもならない勢いで動いていた。新しい時代が始まっていたのだ。王は裁判にかけられ死刑の宣告を受けて、首をはねられた」(258-59)と時代について説明し、ギロチンを「いわばそれは人類再生の標識だった」(260)と表現することにより、ディケンズは一個人の力ではどうしようもない時代の流れを印象づけている。処刑法としてのギロチンの使用は、人道主義的理由から1785年医師ヨセフ・イグナス・ギロティン(Joseph Ignace Guillotin, 1738-1814)により奨励されたが、フランスにおいてもイギリスにおいても死刑執行は、貴族階級に関しては控えられていた(Sanders, *The Companion* 31)。しかし、後に貴族階級に関しても用いられるようになったので、ダーネイの命は風前のともし火であった。

注目に値することは、ディケンズがマネット医師が人間の生死を左右する人間であることと、彼の特殊な立場を次のように説明していることだ。

Still, the Doctor walked among the terrors with a steady head. No man better known than he, in Paris at that day; no man in a stranger situation. Silent, humane, indispensable in hospitals and prison, using his art equally among assassins and victims, he was a man apart. In the exercise of his skill, the appearance and the story of the Bastille Captive removed him from all other men. He was not suspected or brought in question, any more than if he had indeed been recalled to life some eighteen years before, or were a Spirit moving among mortals. (260)

それでもまだドクトルは、それら恐怖の中を、相変わらず端然として歩み続けていた。そのころのパリで、彼ほどよく顔を知られた人間はいず、また彼ほど一種奇妙な立場にいた人間もなかった。無口で、暖かい人間愛の持ち主で、病院でも牢獄でも、今ではなくてはならぬ人間であった。暗殺者たちにも、犠牲者たちにも、それこそ公平平等にその術を施し、いわば一人特別の人間であった。医者としての腕をふるうにあたって、かつてこのバスティユ囚人の経歴と外貌とは、他のすべての人間から彼を区別した。一度として嫌疑を受けたこともなければ、問題になったこともないその不思議さ、まるでそれは、18年ばかり前に死から改めてよみがえった人間か、それとも人間世界の中に降臨した精霊か、いずれにしても、そんなことさえ疑いたくなるほどの奇跡だった。

引用は、マネット医師の医師という立場と彼が暗殺者たちにも犠牲者たちにとっても生をつかさどる人間であることを示している一方、当のマネット医師自身もよみがえった状態であることを説明している。このようなマネット医師は、裁判での供述によりダーネイの命を救うが、ディケンズはマネット医師がかつての監禁状態から解放された状態にあることを示している。なぜならば、マネット医師はルーシーを励ましてやりながらルーシーの心弱さをあわれむ一種の優越感をはっきり見せ、かつての屋根裏部屋も、靴作りも、北塔 105 番も一時的に忘れるからである。マネット医師は、いわば監禁状態で娘に精神的に依存していた状態から解放され家父長としての自覚を取り戻した状態になるが、マネット医師の状態は、ダーネイが共和国の敵、貴族、圧制者一家の一人であり、すでに廃止された特権を利用して人民を弾圧したことにより、また法保護をはく奪された者の一人という訴因により、再起訴されることによって、危機的状态になる。さらに致命的なことは、検事が告訴人としてドファルジュ夫妻の他にマネット医師の名前を挙げることである。「娘はもちろん、娘にとって大切な人たちは、わたしにとって自分の命よりも大切なものです」(301)と言って抗議するマネット医師であるが、彼の抗議は、ドファルジュの供述により無力なものとなる。ドファルジュは、バスティユ攻撃軍の砲手をつとめていたとき、マネット医師が監禁されている独房を調べ、マネット医師自筆の書類を見つける。この書類が法廷で読まれ、マネット医師が投獄されていた理由が判明する。マネット医師の文書はアルバート・ハッター(Albert Hutter)が指摘しているように、彼の精神的外傷の記憶ともいべきもので、ダーネイの二回目の裁判のクライマックスで全体のプロットに関する重要なできごとをよみがえらせるものである(Hutter 91)。

1757年にマネット医師はパリ郊外の家に呼ばれ、狂気の若い女と瀕死の若い男の看病をさせられる。女は若い人妻であったが、サン・テブレモンド侯爵家の弟によって凌辱され、女の弟がそれを怒って侯爵に決闘をいどみ、重傷を負う。男は死に、数日後女も死ぬ。後にマネット医師は誘拐され、侯爵の命令で幽閉される。

「1767年12月31日夜囚人アレクサンドル・マネットは、その耐え難い苦悩の中にあつて、彼らと彼らの子孫をその最後の末裔にいたるまで、断固としてここに糾弾する」(315)

という部分が読まれた後ダーネイは死刑判決を受けるが、マネット医師にとっての不幸は、自分の愛娘の夫が自分が糾弾した貴族サン・テブレモンド家の一員であることだ。³

マネット医師によるサン・テブレモンド一家の糾弾は、貴族が特権を乱用し、市民に被害をもたらしていることへの怒りを示している。作品において貴族が平民の女性を凌辱し、共同噴水栓のある街角を曲がるとき子供を馬車でひき殺す様は、明らかに貴族の傍若無人ぶりを示している。一方で、娘の夫であるダーネイが糾弾している当のサン・テブレモンド一家の一員であることにより、マネット医師はジレンマ(dilemma)にさらされる。マネット医師の状況は、娘がダーネイと結婚しなければ生じなかった状況であり、ディケンズは娘の結婚において生じたマネット医師の苦悩を描いている。ダーネイ救出の見込みが絶望的になると、マネット医師は、「なんとかあの靴を仕上げなくちゃならんのだ」、「仕事をくれ」、「哀れなこのひとり者をいじめないでくれ」(325)と言い、屋根裏部屋以来のことが、残らずすべて一瞬の空想か、それとも夢であったかのように、ドファルジュが世話をしていたときの姿に戻っていく。マネット医師の様子は、かつて彼が医師としてまたダーネイの義理の父として人間の生を司っていたがゆえに、精神面における「生」を実感している状態から、過去のトラウマのゆえに、精神面における「死」あるいは「生き埋め」の状態に逆戻りしていく様を示している。

ディケンズは、*American Notes* (1842)において監禁状態に追いやられた人間の精神状態について描写している。⁴ 第7章「フィラデルフィア、およびその孤独な監獄」(‘Philadelphia, and Its Solitary Prison’)は、東部重罪監獄(‘Eastern Penitentiary’)について書かれてある。ディケンズは、この監獄が絶望的な独房監禁に人々を追いやり、その効果について残酷かつ誤ったものであると考え、次のように述べている。

In its intention, I am well convinced that it is kind, humane, and meant for reformation; but I am persuaded that those who devised the system of Prison Discipline, and those benevolent gentlemen who carry it into execution, do not know what it is that they are doing. I believe that very few men are capable of estimating the immense amount of torture and agony which this dreadful punishment, prolonged for years, inflicts upon the sufferers; and in guessing at it myself, and in reasoning from what I have seen written upon their faces, and what to my certain knowledge they feel within, I am only the more convinced that there is a depth of terrible endurance in it which none but the sufferers themselves can fathom, and which no man has a right to inflict upon his fellow-creature. (99)

その目的においては、その制度は優しく人間味あるもので、そして矯正を目指したものであることは十分納得がいく。しかし、監獄懲罰というこの制度を考案した人たちや、それを実行する慈悲ぶかい方々は、自分たちが行っていることがどういうことであるかが分

かっていないと私は確信する。数年に及ぶ恐ろしい懲罰が受刑者に与える、想像を超えた責め苦と苦悶を押し量ることのできる人はまずほとんどいるまい。私自身その苦しみを推測するに、また受刑者たちの顔に描かれているものから、あるいは、私が知る限りの彼らが心中感じているものから押し量るに、受刑者たち自身以外には誰も計り知ることのできない、また、いかなる人といえども、自分の同胞に対して課す権利など絶対に持っていない、恐ろしい忍耐の深淵がそこにあることをいっそう確信するだけである。

このように述べた後でディケンズは、頭脳という神秘に干渉することは、身体に加えるいかなる拷問よりも計り知れないほど悪い結果を生むものであると思うと訴えている。その理由をディケンズは、表面に現れない心の傷を残すことになるからだと考えている。このことからディケンズは、この監獄に監禁されることは人々に消し難いトラウマを残すと考えていたと言える。

ディケンズがこの東部重罪監獄訪問によって、*A Tale of Two Cities* のマネット医師創造に関するアイデアを得たと推察できる。ディケンズは、囚人の状態を「彼は生きながらにして葬られた人間となるのだ。そして緩慢な月日が何年も流れた後に掘り起こされるのだ。その間、責め苛む不安と恐ろしい絶望以外には、全てのものに対して死んだ人間となるのである」(101)と描写している。この描写は、18年間幽閉され生き埋め状態であったマネット医師の描写に酷似している。ディケンズはまた、ある男が監禁状態の中、絶望の淵へと投げ込まれ、「私に何か仕事を下さい。さもないと狂ってしまう！」(106)と懇願し、仕事を得、発作的に作業に打ちこむ姿を見る。さらにディケンズは、子供たちや妻の夢を見るが、彼らは死んでしまっているか、あるいは自分を見捨ててしまっていると確信している男の姿を見る。ディケンズは、心理学的見地から、「心の病を専門に研究してきた人たちは、皆知り尽くしていることだが、人の性格全体を変えてしまい、その適応力や抵抗力を全て打ちのめしてしまうような極度の抑圧と失意は、その人の心の中でずっと作用し続けている可能性があり、まだ今のところ自己破壊にまで達していないにすぎないのかもしれないのである」(109)と述べている。さらにディケンズは、酒に溺れ身を滅ぼしかかっているのを自らを独房監禁してくれと懇願し、監禁される男の姿を描写している。彼は生業としている靴屋の仕事を毎日しながら、ほとんど二年間監禁状態に置かれる。二年が過ぎる頃、彼の健康が衰え始めたので、ときには庭で働いた方がいいと医者から勧められる。彼は医者の勧めに従い、ある夏の日、庭で穴を掘っていた。と、そのとき、外壁の門がたまたま開けられたままになっていて、男は壁の向こうによく記憶しているほこりっぽい道路と、陽が照りつけている野原を見る。その通路は、通り抜け自由の通路であった。光の中の輝かしい光景を見、彼は無意識の本能で、鍬を投げ捨て、走り出し、二度と振り返ることはなかった。この男の話は、たとえ監禁状態にいても無意識に希望を見出そうとする人間の本能を示している。

American Notes のいくつかの例は、監禁状態の後ルーシーに希望を見出したがトラウ

マが解消されず、再び元の状態に逆戻りするマネット医師を描き出す際、アイデアとして用いられたと十分考えられる。

結び

以上、*A Tale of Two Cities*における個人の精神的外傷とその影響というテーマについて考えてきたが、ディケンズはマネット医師のかつての経験、すなわちバスターク監獄に閉じこめられていた経験がいかに彼のその後の人生に影響を与えているかを読者に示している。マネット医師は、娘のルーシーとの再会により精神面における「生」を回復するが、フランス革命と自身が糾弾した一族の一員が娘の夫ダーネイであることにより、不可避免的に精神面における「死」あるいは「生き埋め」の状態に逆戻りする。マネット医師は、ルーシーとの関係においてかつて救われる者であったが、ダーネイ救出において一時的に娘を救う人間となり、父権を回復する。しかし、ダーネイ救出の見込みが絶望的になると再びかつての状態に逆戻りする。ディケンズは、マネット医師の精神面における変化を描写することにより、いかに過去のトラウマが個人に多大な影響を与えるか、また過去を思い出させるようなことがあるかぎりトラウマを消し去ることが不可能であることを示した、と断言していいだろう。

注

- 1 ディケンズの実体験とは、父親が借財不払いのためマーシャルシーの獄に入れられ、ディケンズ一家はチャールズを除いて全員ここに入り、チャールズだけが外に粗末な部屋を借りて靴墨工場へ通わなければならなかった、という体験である。このときの屈辱と絶望は、ディケンズの心に生涯トラウマとなって残った。
- 2 Charles Dickens, *A Tale of Two Cities* (New York: Oxford UP, 1991), p.10. 以下、引用文はこの版により、引用末尾の括弧にページを示す。日本語訳の部分は、中野好夫訳『二都物語』（新潮社）を参考にした。
- 3 ここで貴族の権利について述べておきたい。一般に旧体制(*ancient regime*)と呼ばれている革命期のフランスの体制は、3つの特徴を持っていた。第一は国民の中に身分差別が存在していたこと(身分制)、第二は領主が様々な貢租を徴収していたこと(領主制)、第三は国を統治する権力が国王のもとに集中されていたこと(絶対王政)である。

身分制のもとでは、聖職者と貴族は税金免除などの特権を与えられ、平民だけが重い税金を負わされていた。しかし、聖職者の中で、位の高い者は貴族の出身で、位の低い者は平民の出身であったので、結局、高位聖職者を含めた貴族と、人口の98%を占める平民との間に

生まれながらの差別が存在していた。そして、貴族の多くは、自分の所領（領地）を持っており、その所領においては、領主として農民から年貢を徴収したり、商品の生産や流通にも重い貢租を課したりする権利（領主的諸権利）を持っていた。つまり、身分制と領主制は、もっぱら貴族だけに有利な特権を与える制度であった。貴族がこのような権利を持っていたのは、中世の制度のなごりである。中世においては、貴族は、自分の所領の治安や公共事業などの行政を担当していたので、その代償として、免税特権や貢租徴収権を認められていた。絶対王政は、貴族の平民に対する支配を基礎にして国内の秩序を維持しようとしたので、身分制と領主制をそのまま容認していた(遅塚 45-46)。しかし革命によって旧体制は崩壊し、あらゆるフランス人が国民として一体化することになった。8月26日に議会で採択された有名な「人権および市民権の宣言」は、その第一条で、「人間は、生まれながらにして自由であり、権利において平等である」と定め、さらに主権が国民にあり、国民は参政権を持つこと、所有権が神聖不可侵であること、などを定めた(遅塚 85-86)。

- 4 シーン・C・グラス(Sean C. Grass)は、ディケンズの作品の中で、マネット医師の描写ほど変わり果てた囚人の本質を描写しているものはない、と述べている。またグラスは、マネット医師の人物描写のほとんどが東部重罪監獄のできごとに基づいていると考えている(Grass 68)。
- 5 Charles Dickens, *American Notes and Pictures from Italy* (New York: Oxford UP, 1987), p.99. 以下、引用文はこの版により、引用末尾の括弧にページを示す。日本語訳の部分は、伊藤弘之、下笠徳次、隈元貞広訳『アメリカ紀行』(岩波文庫)を参考にした。

Works Cited

- Collins, Philip. *Dickens and Crime*. London: The Macmillan Press, 1994.
- Dickens, Charles. *American Notes and Pictures from Italy*. New York: Oxford UP, 1987.
- . *A Tale of Two Cities*. New York: Oxford UP, 1991.
- Grass, Sean C. "Narrating the Cell: Dickens on the American Prisons", *JEGP* Vol.99. No.1. Champaign: The U of Illinois Press, 2000.
- Hutter, Albert. "Nation and Generation in *A Tale of Two Cities*", *Critical Essays on Charles Dickens's A Tale of Two Cities*. Ed. Michael A. Cotsell. New York: G. K. Hall & Co., 1998.
- John, Juliet. *Dickens Villains: Melodrama, Character, Popular Culture*. Oxford: Oxford UP, 2001.
- Reed, John R. *Dickens and Thackeray: Punishment and Forgiveness*. Athens: Ohio UP, 1995.
- Sanders, Andrew. *Charles Dickens*. Oxford: Oxford UP, 2003.

. *The Companion to A Tale of Two Cities*. Mountfield: Helm Information, 1988.

Wilson, Edmund. *The Wound and the Bow*. Athens: Ohio UP, 1997.

河野健二、樋口謹一、『フランス革命』、河出書房新社、1997.

遅塚忠躬、『フランス革命 歴史における劇薬』、岩波書店、1997.

A Tale of Two Cities: The Trauma and Its Influence

YOSHIDA, Kazuho

A Tale of Two Cities (1859) is Dickens's 12th novel, serialized unillustrated in weekly parts in *All the Year Round* (April 30 to November 26, 1859). It was simultaneously issued in eight monthly numbers by Chapman and Hall, illustrated by Hablot K. Browne. It was published in one volume in 1859.

The purpose of this paper is to show the theme of the traumatic impact and its influence on a man in *A Tale of Two Cities*. In this novel, Dickens brought out the contrast between the affairs of England and France in the eighteenth century and the traumatic impact of French Revolution on private lives. He represented the interrelationship of past and present, and the interconnection between memory and the consequences of remembering, in both public and the private realms. Dickens showed readers how the past experience of Dr. Manette in the Bastille had an influence on his life after having left the prison. Doctor Manette was, in 1757, a physician in Beauvais who was taken by Marquis St. Evremondes and his twin brothers and forced to attend a peasant girl who had been raped by the young brother; Dr. Manette also cared for the girl's brother, wounded while defending her honor. After the patients died, the Marquis St. Evremond had the doctor, who knew too much, thrown into Bastille to keep him quiet. There he remained for 18 years. Two years after his imprisonment began, his English wife, Madame Manette, died and their orphaned infant daughter, Lucie, was taken to England by Jarvis Lorry, the family's financial advisor. *A Tale of Two Cities* begins when Manette is released from prison and recalled to life. Lorry escorts the 17-year-old Lucie, who has never seen her father, to Paris to bring the doctor back to England. At first the doctor, who has worked as a shoemaker in prison, fails to recognize Lorry or his daughter, but her loving care and her physical remembrance to his wife, especially her golden hair, gradually restore him. When Lucie marries Charles Darnay, a French émigré in England, however, the doctor temporarily reverts to

his prison occupation as a shoemaker on learning that Darnay is really the Marquis St. Evremonde, the nephew of the Marquis who had him imprisoned. When Charles is arrested in Paris, Manette works to save him, but a manuscript he wrote in prison describing the crimes of the St. Evremondes is revealed by Defarge and Darnay is condemned to death. Although Dr. Manette regains his own mental 'life' by meeting Lucie, his daughter again, he inevitably relapses into mental 'death', because he remembers the past imprisonment at Bastille. Dickens showed how the past trauma had a great influence on a man by representing the mental change of Dr. Manette and his trauma could not be erased from his mind if he were faced by anything which reminded him of his painful past.

